

江戸言葉の誕生と話芸

天保18年（1590年）7月13日、豊臣秀吉軍は小田原城を落城させた。その際の功労者であった徳川家康が秀吉から与えられたのは、その小田原でも武士の憧れであった鎌倉でもなく、鄙びた田園風景が広がる江戸であった。家康は小田原城落城から1カ月も経たぬ8月初旬に、品川から金杉、飯倉、赤坂を経由して貝塚（いまの麴町付近）を経て江戸城に入った。これが俗に言う「関東御入国（江戸御打ち入り）」である。

そもそも家康が入城した時点では、江戸城とは名ばかりで城の周囲には田園風景が広がり、目前には日比谷の入り江に続く海が、背後には広大な関東平野が広がっていたという。

それから約10年後、慶長5年（1600年）、関ヶ原の戦いに勝利した家康は、慶長8年（1603年）

標準語の誕生とメディアの機能 テレビは標準語のお手本に非ず

ジャーナリスト

三木寛郎

に征夷大将軍となり、江戸幕府が開かれた。

都市整備を急ぐ江戸幕府は、周囲の台地を切り崩し、その土で海を埋め立て、湿地を干拓し、運河を整備し、急激に都市化を推し進めた。

その工事のためにますます多くの人足が集められ、整備された町に今度は商人や職人が集められ、それこそ日本中からさまざまな出身の人間が移り住むことで都市化は急速に進み、さまざまなお国訛りが入り乱れることになった。厳密に言えば、関西からの流入が多かった武家階級と、それこそ全国から人の集まった町民階級では少なからず違いはあったとされるが、それでもそうした様々なお国訛りが融合しながら、江戸言葉が形成されていったといわれている。

当初の江戸言葉は「…だんべい」という接尾語であったり、「ひっ…」という接頭語であったり、とにかく

多種多様な人種が多種多様な言葉を持ち込むことで、江戸は言葉においても坩堝と化したのである。

それは「六方言葉」になり、さらに「べらんめい調」へと進化していく。

そんな徳川幕府が作り上げた江戸の町をよく顕しているのが落語に登場する「道中付け」と呼ばれる読み上げである。有名な古今亭志ん生師匠の道中付けを紹介しよう。

「下谷の山崎町を生まして、あれから上野の山下手い出て、三枚橋から上野広小路へ生まして、御成街道から五軒町へ出て、そのころ、堀さまで鳥居さまというお屋敷の前をまっすぐに、筋違御門から大通りへ生まして、神田の須田町へ出て、新石町から鍛冶町へ生まして、今川橋から本白銀町へ生まして、石町へ出て、日本橋を渡りまして、通四町目へ生まして、あれから京橋を渡りまして、まっすぐに新橋を

右に切れまして、土橋から久保町へ生まして、新し橋の通りをまっすぐに、愛宕下へ生まして、天徳寺を抜

けまして、西の久保から飯倉六町目へ出て、坂を上がって飯倉片町、そのころ、おかめ団子という評判の団子屋の前をまっすぐに、麻布の永坂を降りまして、十番へ出て、大黒坂から一本松、麻布絶口釜無村の目連寺へ来たときには、ずいぶんみんなくたびれた（立風書房「志ん生長屋はなし」より）」

となるのだが、まるでほとバスの観光巡りのように江戸の町が浮かんでくる。志ん生はこの道中付けの最後に「演者もくたびれたよ、これは…」とやって拍手と笑いを取ったのだが、まさにこれが「芸」である。

日本語の乱れはテレビから

さて、現代のお話したが、昨今テレビから流れ出てくる日本語には、どう

にも我慢ならない汚い言葉遣いが多い。ぎはしないだろうか。

グルメ番組などを見ていても、お笑いタレントだか芸人だかが「これうめえじゃん」などと平然と宣って、挙句は口に入ったままぐちゃぐちゃと発言するような光景に遭遇することは日常茶飯事である。

志ん生師匠の「道中付け」ではないが、話芸が芸ならば、あまりに芸がなさすぎる。

また映画やドラマなどで日本語を駆使しているのは俳優たちまでもが、自身の親を語る際に「父が」あるいは「母が」とすべきところを平然と「お父さんが」「お母さんが」と恥ずかしげもなく発声するのを見ても何ともやりきれない気持ちにさせられる。

ついでだが、レポーター役のタレントたちが、訪問先で年長の男女に向かつて「お父さん」「お母さん」あるいは「おじいちゃん」「あばあちゃん」と馴れ馴れしく声を掛ける図も厚かましく見えて鼻につく。

昨今は、局に所属するアナウンサーまでもが、「～さんに伺いました」とすべきところを「～さんにお聞きしました」と発言する。

かつてラジオが普及し始めたころ、そこに登場するアナウンサーの語り口は、一般の聴取者（今で言うリスナー）からすればお手本のようなもので、標準語の勉強になるとさえされたものであったはずだ。

少なくとも、テレビやラジオに出演するプロであるならば、せめて日本語の正しい用法は身につけていた方がいいし、少なくとも演出上の下品な言葉遣いと、通常の会話で使用する言葉遣いの使い分けぐらいはできて当然だと思っただけだろうか。

それこそ「抜き言葉」などは言葉の変遷の一環として、時代とともに移り変わっていくものとして許容するとしても、尊敬語、謙譲語、丁寧語の使い分けと、子どもに聞かせることのできる日常会話程度は、メディアに登場する人間の常識として身につけていたいただきたいと願うのである。

標準語とラジオ、テレビ

江戸は関東の一部にすぎず、関東地方で話されていた土着の言葉がそのまま江戸の話し言葉になったわけではない。いわゆる「べらんめえ」

口調の関東土着の言葉は、江戸庶民



アナウンサーの語り口は
お手本のようなものだった

の間で使われてはいたが、それとは別の話し振りが武家社会を中心に成り立っていったのだ。それが標準語の直接の祖先である。

日本列島にはいくつもの藩があり、今とは比べものにならないほど各地でことばの違いがあった江戸の武家社会は、言ってみれば各藩の寄り合い所帯のようなもので、幕府や他藩との関係において、お国訛りとともに地方の文化を丸出しにすることは憚られた。各地方の藩士たちは、国許の言葉とは違う共通の言語を話す必要に迫られたのである。もちろんそれは「べらんめえ」の江戸土着の言語ではなく、武家社会という特殊社会の中で形成された人工的ともいえる言語だったのである。

徳川幕府が瓦解して明治維新がやってくると明治政府は公式の文書

や学校教育現場での共通言語の整備に迫られた。その基盤となったのが、武家社会という特殊社会の中で形成された人工的言語だったのである。

こうして生まれた「標準語」はある部分で明治時代に東京の山の地域で話されていたことばを基盤とし、それ以降の日本語における、その名の通りの標準となり、日本の近代化とともに日本全国に普及していった。

そうした動きの中で重要な役割を果たしたのがマスメディアとしてのラジオだったので。

まだまだ各地方に訛りが残っていた時代に、まさしくラジオは子どもたちのお手本として機能し、ひとつのテーゼとなっていたのである。

今の時代に、放送メディアにその教育的な側面を期待するのは時代錯誤かもしれないが、老若男女それぞれ幼い子どもたちが耳にするテレビというメディアにおいて、ここまで聞き苦しい、乱れた日本語が横行してよいものだろうか。

番組を制作する側にも、出演される出演者の方たちにも、どうか一考をお願いしたい。